

私たちの住むこの地域に伝わる民話を通して、女性の生涯、居場所、労働、価値観・・・  
昔も今も、根底に息づく「生きづらさ」について、改めて考えてみませんか？

## 高槻物語 ☆おシオさんの名まえ☆ あらすじ

縁があつて、お嫁にきて、式がすんで、あくる朝のことです。

姑さんは目が悪くて畑仕事ができず、小銭をためて金貸しをしていましたが、気がきつい人でした。

その姑さんが「ちよつと、わたしのまえに、座つとくなはれ」と言われました。

「へ」と答えて座つたら、いきなり、

「このうち(家)は、子姑も多い、貧乏です。そやさかいに、あんたの名を『サト』というような、甘い名で呼んでられまへん。これからは『シオ』と名をかえてもらいます。今日から『おシオさん』と呼んだら、ちゃんと返事しとくなはれ」と言われました。「へえ、わかりました。口答えるのやおまへんけど、親は、蝶よ花よで育ててくれたのではございまへんけど、『サト』と名をつけて、村里の里という字を書いてもええと言うてくれました。甘い砂糖でのうて、村里の里です。どなたにも好かれる名やと思います」と言いました。

それでも、姑さんは、「砂糖はなくてもくらせます。塩は、なけりや死にます。『塩のように、なくてはならん人や』と、息子らにはそう教えます。シオと呼はしとくなはれ」と、念を押されました。

「はい、返事いたします。」と云うて返事してたら、となり近所も『おシオさん』と言われます。

それで「へえへえ」と返事してたら、とうとう村じゅうが、『おシオ』にしてしまいました。

おシオさんは、死ぬまえには

「本名はサトでつせ。うそやおません。戸籍みとくない」と云うてはりました。

・・・親から名付けてもらった愛おしい名まえを封印して生きた「サトさん」。昭和初期、高槻市の淀川べり近くの農家に嫁ぎ、婚家で力強く生きた女性です。「サトさん」は、最後に、戸籍に記載された名まえを取り戻すことができたのでしょうか？懐かしい「村里」を思い浮かべて、ほほえみながら旅立つことはできたのでしょうか？・・・

## 「高槻物語」

宇津木秀甫(著) 2011年発行

収録されている民話一編のあらすじです。雰囲気損なわない範囲で句読点を補い、可能な限り方言を残しています。(昔ばなし語りべ集団まとめ)

## 編集室の語り

## ★この民話を紹介しようと思った理由

この物語は作者がおシオさん本人に聞き取りを行って著したものです。現在ではありえないことですが、その時代の農家に嫁いだ女性の立場が伝わってきますね。女性の権利は少しずつ認められるようになってきましたが、せつかく手にできるようになってきた権利も自由も、主張し続けないと消えてなくなってしまいます。

いつの間にか無くなってしまふことがないように、先人たちの記憶を忘れないで、若い年代にもしっかりと伝え、語り継いでいきたいと思っています。(ルナ)

## ★読み終えて

姑さんが「サトさん」の名まえを「おシオさん」と呼ぶのは力関係の誇示でしょうか？それとも生まれ変わった気持ちで我が家に来てほしいとの気持ちからだったのでしょうか。愛称だと割り切れずに過ごしたのは、呼び名変更以外にもあったと思われる日々の不満も影響していたのではないかなと思います。夫婦の会話だけでも、「里」と呼んでもらっていたら、死ぬ前の言葉は違っていたかもしれませんね。(ぽっと)

## ★読者のみなさまへ

親からの最初の贈り物である名前を失ってもめげることなく、精いっぱい生きた一人の女性の姿を通して「今、生きづらくても自分を見失わずに前を向く」ことの大切さが伝わってくるようです。優しさ、強さ、おおらかさ、家庭における女性の立ち位置も感じることができる民話「おシオさんの名まえ」が、読者のみなさまの心に残りますように…。(スタッフ一同) (この物語は「昔ばなし語りべ集団」によって語り継がれています)

